

アパマンショップ

賃貸管理も

全国の
管理物件

約103万戸^{※1}

賃貸住宅
仲介店舗数

No.1^{※2}

取引
オーナー数

約20万人^{※1}

お気軽にご来店ください。

アパマン オーナー



※1 自社調べ
※2 2021年11月12日時点、1043店舗。主要9事業者における店舗数。直営店舗とフランチャイズチェーン加盟店舗の合計値。海外及び契約店舗含む。全店舗とは、出店が確定している店舗、出店準備中店舗を含む。(日本マクドナルドフランチャイザー株式会社)



I.B

地域企業の繁栄をサポートする
経営情報誌

2024新春特別号

発行所 株式会社データ・マックス
〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町2-3 福岡フジランドビル8階

税理士 加藤 十 郎

企業の繁栄をサポートする経営情報誌

I.B

INFORMATION BANK

2024 新春特別号

分断と対立

日本再生への処方箋

経営の情報サポーター
株式会社 データ・マックス



ISBN978-4-910722-06-1
C9033 ¥1000E
定価:本体1,000円+税
IB2024新春特別号
(アイビー2024シンジュントクベツゴウ)

現在の日本を活性化させるため 縄文時代から学び得るものはあるのか？



縄文時代に関する研究の進展により、当時の日本は外に開かれた世界でありながらも、内では平和な理想郷を築いていたことがより明らかになってきた。1万年以上も戦争がなく、豊かな食生活に支えられ、高度な芸術作品を量産して、1つの集落が数千年間も存続していた、まさにユートピアであった。現在、課題となっているSDGsを1万年以上も前に完成させていたのだ。その集落の様子を振り返りながら、現在の私たちが何を学び得るのかを考える。

縄文アイヌ研究会主宰
澤田 健一 氏

縄文時代の姿

近年、縄文遺跡の発掘調査や科学的な解析(たとえば放射性炭素年代測定や核DNA解析など)手法の向上により、縄文時代の真の姿が徐々に明らかになってきた。まずは簡単に縄文時代の暮らしを見るところから始めていこうと思う。

よく指摘されることであるが、縄文時代の日本列島は1万年以上にもわたって戦争のない平和な時代だった。これほどの長期間を平和に暮らした民族は、世界中に日本民族しか見当たらないだろう。そのため、集落の存続期間も信じ

られないほど長い年月におよび、たとえば北海道の垣ノ島遺跡(函館市)は6,000年間、常呂遺跡(北見市)や標津遺跡群(標津町)に至っては8,000年間にもわたって集落が営まれてきた。平和で持続可能な社会、究極のSDGsである。

さらに縄文集落では介護を行っていた形跡が見られる。北海道の入江貝塚(洞爺湖町)から出土した「入江9号人骨」(縄文後期の成人男性)は、頭や体幹の骨は通常の大人と変わらないが、手足の骨が異常に細く、「筋萎縮症」を患っていたことがわかった。長期に

わたり周囲の人々の手厚い介護を受けながら日常生活を送っていたようで、少なくとも十数年間にわたり介護を受け続けていたのである。

そして季節ごとにさまざまな植物を採集しており、漁猟や狩猟も行い、豊かな食生活を送っていた。集落の周囲には栗やドングリなどの堅果類の樹木を植林しており、その実を大量に保存するために数多くの貯蔵穴をつくり、その数は数十から200以上にもおよぶ。その樹木が人工林であることは、それらの遺伝子が均一であることから判明して

いる。

縄文の人々は食べることに困るどころか豊かな食生活を送っていたようで、縄文クッキーと呼ばれるお菓子のようなものもつくっていたようである。青森県の三内丸山遺跡(青森市)や秋田県の池内遺跡(大館市)ではお酒のつくりカスが出土していて、ニワトコの実など数種類の植物からお酒をつくっていた。少なくとも両遺跡で酒づくりに使用した植物の成分比が一致していることから、酒づくりの共通したレシピがあったのではないと思われる。

豊食であったからこそ、食糧を奪い合う戦争も起きなかった。ちなみに資源に乏しいイースター島では食糧を奪い合う戦争が島全体で起こり、各集団の守り神であるモアイ像を互いに引き倒しあい、最後には島内すべてのモアイ像が倒された。しかし縄文集落ではそうした食糧戦争が起きなかった、これは非常に重要な事実である。

また、縄文人は料理においてコクを出していたようである。北海道の大正3遺跡(帯広市)から出土した土器についていたお焦げの炭素・窒素同位体比分析によると、約1万3,000年前という結果が得られた。その土器でサケを煮て浮いてくる油を採取して、調味料や燃料として使っていた可能性が高いことがわかり、これを「魚油採取説」という。

ところが、フランス料理でも中華料理でもイタリアンでも、「コク」という概念がなく、20世紀になっても日本人がいう「コク」という概念を理解できなかったそうである。概念がないのだからそれを表す単語は存在しておらず、英語ではRich、中国語では富有的と表現するが、何か少し違う感じがする。それに対して「魚油採取説」が正しければ、日本民族はそんな1万3,000年も前の大昔から「出汁」で「コク」を出して、贅沢(リッチ)な味を楽しんでいたことになるのである。

そもそも、1万6,500年前から煮炊き料理をし始めていることが驚異的である。土器が煮炊きの道具であったことは、付着した煤や焦げ付きからわかる。それは土器を焼成したときの焼きむらとは別物の変色なのである。煮たり茹でたり蒸したりすることで食べられる食材が増え、また殺菌や食べ物の消化という面でも食生活が改善されてきた。

こうして縄文人はより多くの栄養を取り込んでいったのである。私たち日本人が長寿である要因は縄文時代からの蓄積といえるだろう。私たちの体内に摂取された豊富な栄養素の蓄積は、他民族と比べて1万年ものアドバンテージがあるのである。

さらには、縄文土器は単なる煮炊きの道具という範疇を越えて、もはや芸術作品の域

に達している。火焰型縄文土器を見た岡本太郎は「なんだ、これは！」と叫んだという。精緻でありながらも爆発的なインスピレーションを与える縄文の芸術作品は、今でも私たちに感動を与えてくれる。

しかも、非常に硬いヒスイの加工を行って、美しい曲線をもたせ、それに穴まで開けてしまう。ヒスイの加工は縄文時代からになるものの、一般的な石の研磨・穿孔(穴を開けること)技術の発祥は後期旧石器時代にまで遡る。日本列島各地では3万8,000年前から、研磨された石斧(刃部磨製石斧と呼ぶ)がすでに1,000本以上も出土している。

それに対して、ヨーロッパで石の研磨が始まるのはせいぜい1万年前である。日本から遅れること2万8,000年も経ってから、ようやくヨーロッパは日本に追いついたのである。日本の技術はそれほど世界の最先端を独走していたのであるが、おそらく多くの日本人はこうした事実を知らないだろう。

このように、縄文時代とは豊かな食生活に支えられ、高度な芸術作品をつくる技術と知性をもって、困った人を介護し支え合う福祉社会で、戦争のない平和な社会が1万年以上も続いた理想郷であり、1つの集落の存続期間が6,000年~8,000年間にもおよぶという、現在から考えるとユートピアのような世界だったので

ある。繰り返しになるが、これこそ究極のSDGsである。

外に開かれていた縄文世界

ところで、多くの人は縄文時代の日本について、内に閉ざされていた社会と捉えているのではないだろうか。実は縄文は外に開かれた社会であった。三内丸山遺跡の六本柱の巨大な構造物の柱は栗の木であり、地中部分も含めると全長20m近くにもなる(この長さを算出したのは大林組)。しかし国内の栗の木は5.6mを超えると枝分かれしてしまう。条件を満たす栗の木を探したところ、ロシア西方のソチ市で見つかった。

同じくロシア西方から世界最古の木製の彫像が出土していて、シギルの偶像と呼ばれるが、その彫像はドイツの年代測定によって1万1,000年前

のものだと判明した。その彫像の顔や体には数多くの線が刻まれていて、明かにイレズミをしていた人々の像なのである。イレズミのある縄文人がロシア西部まで出て行って、20mもまっすぐに伸びた栗の木を見つけて、日本まで持ち帰ったのではないのか。

また、約1万年前の福井県と滋賀県の遺跡からはアフリカ原産のヒョウタンが出土している。アフリカから日本列島まで流れてくる海流などは存在しない。つまりアフリカまで行った縄文人が持ち帰ったと考えるしかない。

日本民族は縄文時代以前から長距離の外洋航海をしていたことが明らかになっている。琉球列島の島々からは2~3万年前の古人骨が多数出土している。その当時は最後の氷河期であり、その期間は海面が現在よりも100m以上も

低くなっていたが、琉球列島はどことも陸続きにはなっていない。列島内には200km以上の海峡もあるが、それをものともせず往来していたのである。そしてその当時、外洋航海をしていた痕跡は日本民族にしか見つかっていない。縄文は外に開かれた時代でありながら、内に平和な理想郷をつくっていたのである。

都市は危機

それでなぜこのような社会が実現できたのだろうか。その重要なカギとなるのが都市化の問題である。都市化を考える前に「文明」と「文化」について簡単に触れる。

縄文を文明だとする主張がなされている。国際政治学者の故サミュエル・ハンチントン教授なども、著書『文明の衝突』において、「日本は独立の文明をもつ唯一の国」と定義している。縄文時代のことを指しているわけではないが、都市のない時代の日本について「文明」と定義したことは非常に重要な指摘であると捉えるべきだろう。それほど古代時代の技術や文化レベルは高かったといえる。

そうであっても、縄文は「文明」ではなく「文化」と定義される。その理由は「都市化」されていなかったことにある。答えを先にいうと、縄文人はあえて「都市化」を避けていた。集落の適正規模を保つためである。縄文社会は人口が



三内丸山遺跡の六本柱

PROFILE

澤田 健一 (さわだ・けんいち)

1964年、札幌市生まれ。同志社大学工学部卒。既存の枠にとらわれず、歴史・考古学を独自に学ぶ。思いつくまま読み・調べ・歩き・聞き・見ることを旨とし、文献やデータを忠実に読み解き、歴史の真実に迫ることを目指している。縄文アイヌ研究会主宰。著書に『縄文人の日本史』『夷の古代史』『古代文明と縄文人』『大和朝廷vs邪馬台国』(いずれも柏艸舎刊)。



増えると集落を分散させており、都市が誕生することがなかったのである。そのために時代とともに集落が増えたり減ったりして、1つの集落が肥大化することがなかった。今の定義で表現される「文明」ではなく「文化」社会の道を選択していたといえる。

それは集落の意思決定の手段によるところが大きいのだと考える。後のエビスやアイヌの手法に残されているが、意見が割れたときは徹底的に話し合うのである。アイヌの談判はチャランケといい、当事者同士に話し合いをさせ、当事者で解決できないときはその集落の村の長同士が話し合っ解決していた。エビスの社会も同様で、意見がまとまるまで2晩でも3晩でも話し続けた。多数決ではなかったのである。

その片鱗が『日本書紀』から読み取れる。日本武尊が当時の蝦夷と呼ばれた人々を捕虜として熱田神宮に献上したところ、昼夜騒いで礼儀がみら

れなかった。たまたま三輪山のほとりに移されたがここでも静かにはならず、「蝦夷は、人並みでない心の者どもだ」と呆れ果てられ、西国の各地に分散して住まわされることになった。おそらく、「武器を奪って戦う」か「夜陰にまぎれて脱走する」か「大人しく朝廷に従う」のか、みな口々に論じ合っていたのだろう。多数決社会ではなかったのである。

現代社会では「最大多数の最大幸福」が正義とされる。国会議員の配分も一票の格差を配慮して地方の議席は減らされ大都市に集中していく。地方の人々は切り捨てられたと感じ、大都市に一極集中していく。はたしてこれが公正な社会の在り方なのだろうか。

経済学者の代表的存在であるジョン・ケインズは、問題は「勝ち馬に乗りたがる大衆のねじれた欲望」にあると言っていた。その後も似たような指摘は数々されてきたと思う。だがその解決方法を問わ

れても、答えを導く道筋が示されることはなかったのではないだろうか。そして、現在の社会問題を解決するおそらく最大のヒントが、1万年前の日本の縄文社会にあるのだといえそうである。

数による最大多数の結論より、みな認め合える結論を導く手法、一極集中の都市化ではなく、地方も生き生きとする社会、そうした現代版ユートピアが実現できないのかと願う。コロナ禍による怪我の功名で自宅や地方でも仕事ができる分野が増え、地方に移転する企業も現れ、地方について発信するユーチューバーが増え、外国人観光客は日本人の間でさえ知られていない地方にまで行き始めている。これらは一筋の光明であるとしても、答えはまだその先にありそうである。

最後に岡本太郎の含蓄ある言葉を紹介して終わりとす。「人類は進歩なんかしていない。何が進歩だ。縄文文化のすごさを見ろ！」